

資料 6

火山噴火予知連絡会 第 7 回 火山活動評価検討会議事概要

日時：平成 21 年 1 月 23 日（金） 10 時 00 分～11 時 30 分

場所：気象庁講堂

出席者：石原和弘（座長）、本橋伸夫（内閣府池内参事官代理）、伊藤秀美、今給黎哲朗、
鍵山恒臣、中川光弘、原 義文、横山博文、渡辺秀文

オブザーバー：飯村、根本、畠山、三森（国土地理院）

事務局：北川、舟崎、宮村、加藤、井上（気象庁火山課）、宇平（気象庁管理課）
安養寺、荒井（砂防・地すべり技術センター）

○資料 1（今後のスケジュール）についての説明

今回整理した結果に基づいて、観測網のあり方を検討したい。結果は次回の火山噴火予知連絡会（2/18）の際に報道発表することを予定している。また、今回の結果、意見をふまえて、3月に予定している第 8 回検討会で最終とりまとめをしたい。

（質疑・応答）

- ・ 本検討会の目的は今後 100 年など中長期的観点での活動評価である。火山観測体制等に関する検討会（以下、観測体制検討会）が設置されて以降、短期の活動評価が必要になったのではないか。
 - 本検討会の主旨は変更していない。本検討会で、観測体制検討会に資する議論をしていただいたので観測体制検討会に報告させていただくというスタンスである。
- ・ 本検討会では 100 年、30 年という中長期的スパンでの評価を議論してきたが、観測体制検討会の議論のタイムスケールはどうなっているのか。観測体制の充実をはかるといふ目的で本検討会から結果を渡すのであれば、評価の考え方・視点が違う。
 - 活動のスパンがわかっている火山なのか、わからない火山なのかということに分けられるのであれば、その結果をもとに各火山に見合った観測体制を整えていきたい。
- ・ 将来的な火山監視・観測体制をどうすべきかという議論が必要である。
 - 本検討会では活火山の認定等の課題が残されているため、引き続き検討する場を設ける予定である。
- ・ 近日中に開催予定の観測体制検討会の検討状況をみて、本検討会の最終報告をまとめる方向で了解されたい。

○資料 2、資料 3 - 1（監視・観測体制の充実等火山防災対策の必要な火山の選定）についての説明

中間報告までに 42 火山について評価して頂いた。今回は残りの火山について評価したので確認して頂きたい。富士山や鳥海山などのように噴火間隔だけでは評価できない火山も、過去の履歴をみて短い間隔で活発に活動していたことなどを考慮して

評価した。また、噴気があるというだけでは選定していない。地震活動の評価には浅部という条件を入れた。社会的影響についても、人家に近いというだけでは選定していない。いずれも何らかの複合的な活動、要因を踏まえて評価している。結果として、ダイク貫入があるアトサヌプリ、地震活動が認められる大雪山、日光白根山、乗鞍岳、青ヶ島の5火山を追加で選定する。

(質疑・応答)

- ・ 今回の考え方はよい。今後、熱的変動の観測解析を評価できるようにしたい。
 - 熱活動自体は多くの火山で確認されているが、火山活動の活発化が心配される、されない、という表現をするということではよい。
- ・ 例えばGPSなどの技術向上により、以前みえていなかったことが見えはじめるということもあるので、評価基準そのものを見直す必要が生じてくると思う。現段階では基準があるということがよいことである。
- ・ 摩周とニセコは観光施設等が接近している。注意すべきという認識を持つ必要がある。
 - 活動が活発化した場合には、観測体制を強化したい。
- ・ 羅臼岳は700-800年間隔で噴火しており、前回は700年前である。この選定基準では選定されない。ただし、地質調査でわかるものもあり判断は難しい。選定しなかった火山についても今後注意して検討すべき余地を残すべき。
 - どこかで線引きをしなければならないが、羅臼岳のようにグレーの火山があることは、認識している。報告書にも、観念的になるかもしれないが明記しておく。他にないようなので、これらを選定火山とする。

○資料4 (火山学的知見の有無に基づく整理) についての説明

11火山を対象にした近代観測が始まって以降のデータ等に基づく経験的知見である。

(質疑・応答)

- ・ 阿蘇山など、マグマがゆっくりと上昇してくる噴火には適用できるかもしれないが、大規模な噴火では、ここで考えているよりもマグマが速く上昇するといったプロセスを経て推移していく可能性が高い。これをもとに対応を考えていくと、本当に対応が必要な時に破綻するおそれがある。整理したとおりに噴火が推移した場合には使えるかもしれないが、根拠となるデータの種類とそのしきい値を設定しておく必要がある。また、想定していた推移から外れた場合に何を観測したら良いかなどを検討しておく必要がある。
 - 観測体制検討会において、そのように検討したい。
- ・ プロセスも大事だが、どのような現象に対して、どのような範囲・観点による監視が必要なのかといった整理も必要である。
 - 何のためにこのような整理をしたかを明記する。内容については今後引き続き精査するが、今回の分け方・整理方法について了承されたい。
 - 了承した。

○資料 5（最終報告の骨子案の検討）についての説明

（質疑・応答）

- ・ 活動評価をする上で必要な情報を整理した上で、個々の火山において十分な項目と、そうでない項目があること、火山ごとに知見の内容に相違があることがわかる整理が必要。
- ・ 骨子目的に記されている「火山防災対策」の記述範囲は狭すぎるのではないか。
- ・ 「火山学的知見の有無に基づいた整理」の表現等、誤解のないよう文言、文章を再度精査する必要がある。
- ・ 今後の評価の見直し方針を書いておく必要はないか。
→ 定期的には 2 月の噴火予知連で見直すことになっている。緊急の見直しも含め、このような体制があることを明記する。今後の検討方針等と合わせて追記する。
- ・ 現在の観測体制とそこで想定している噴火が、その火山の中でどのような状態に相当するのかを明記する必要がある。
- ・ 資料 4 の書き方として、はじめに簡単に基本的な記述をして、どのような監視観測体制をとっているのかを書き、それによってわかる最近の活動状態を記述してはどうか。全ての火山で書けないとしても、スタイルは統一して情報の多い火山、少ない火山を明らかにすることも大事ではないのか。
- ・ 自分が一から火山観測体制を組むとしたら何が必要かという視点で整理してはどうか。

○その他

- ・ 2 月の予知連への報告に向けて事務局で整理する。報告案は各委員にも見てもらいたい。
- ・ 次回検討会の開催は 3 月を予定している。

以 上